

事例 1

踏切道上で停止していた大型のダンプと列車が衝突、脱線し、列車の乗客が負傷

概要：3両編成の上り普通列車の運転士は、速度約78km/hで惰行運転中、平成23年11月1日（火）11時14分ごろ、本件踏切（第1種踏切道）で停止している大型のダンプを本件踏切の約200m手前で発見し、気笛を吹鳴するとともに非常ブレーキを使用した。間に合わず、列車はダンプと衝突した。列車は、1両目の車両の全4軸が脱線し、本件踏切から約30m行き過ぎて停止した。

列車には、乗客約40名及び運転士が乗車しており、乗客4名及び運転士が負傷した。また、ダンプの運転者は降車していたため負傷しなかった。

列車は、1両目の前面及び床下機器等が損傷し、ダンプは大破したが、火災の発生はなかった。

事故発生に至る経過

事故当日の朝、ダンプ運転者は荷降ろしのため会社から出庫し、運転中にアクセルを踏んでもエンジン回転数は上がるが速度が上がらないという現象に気付いた

ダンプ運転者は、点検のため、整備工場へ向かう途中、本件踏切内でダンプが前へ進まなくなった

ダンプ運転者は、助けを求めためダンプを降りたが、踏切の警報機が鳴り出したので、助けを求めのを諦めた

ダンプ運転者は、踏切の非常ボタンを探したが見つからなかった

列車の運転士は右カーブを通過したあたりで本件踏切にダンプが停止しているのを認め、気笛を吹鳴し、非常ブレーキを使用した

事故要因の解析

ダンプ運転者は、本件踏切を通過中にアクセルを踏んでもダンプが前へ進まなくなり、ダンプを降りて近くにある会社に助けを求めに行こうとしたら踏切の警報が鳴り出したので、ダンプを踏切外に移動させることを諦めたものと推定される

本件踏切に踏切障害物検知装置又は踏切支障報知装置（非常ボタン）が設置されていれば、これらの作動により踏切障害事故時に被害が軽減された可能性があったと考えられる。

列車の運転士は、本件踏切約200m手前でダンプを発見し非常ブレーキを使用した。間に合わず、列車がダンプに衝突したものと推定される

11時14分ごろ

ダンプと列車が衝突した



列車とダンプの停止状態

脱線現場の状況



復旧後撮影

本件踏切の状況

原因

本事故は、ダンプが本件踏切を通過中にアクセルを踏んでも前へ進まなくなり停止していたところを列車の運転士が発見し、非常ブレーキを使用した。間に合わず、列車がダンプと衝突したことにより、1両目の前車全2軸が右へ、後車全2軸が左へ脱線したものであると考えられる

再発防止に向けて

必要と考えられる事故防止策

列車から見通し距離が不十分な踏切において、このような事故を防止するには、踏切障害物検知装置及び踏切支障報知装置（非常ボタン）が効果的であり、それらの設置を更に推進すべきである。

本事例の調査報告書は当委員会ホームページで公表しております。（2012年8月31日公表）

<http://www.mlit.go.jp/jtsb/railway/rep-acci/RA2012-6-1.pdf>